

【原著論文】

インド英語とフィリピン英語語彙の背後にある意味特徴について： アジア英語語彙の意味特徴解明に向けて

山口 和之

日本体育大学基礎教養系

On semantic nature of lexicon in Indian and Philippine English: Aiming for revealing semantic lexicon in Asian Englishes

YAMAGUCHI Kazuyuki

Abstract: The aim of this study is to reveal semantic nature of content words found in Indian and Philippine English based on metaphor, metonymy and synecdoche in the sense used in Cognitive Linguistics. Compared to studies on phonetics and syntax in the field of World Englishes, semantic studies have been far behind. This study specifically aims to make some contribution in order to solve two problems found in World Englishes; obstacles of communication derived from differences of English varieties, and regarding non-native speakers of English as 'incorrect'.

要旨: 本稿の目的は、インドおよびフィリピン英語の内容語の意味特徴を明らかにすることにある。世界の諸英語に関する研究において、音声や文法特徴と比べると語彙の意味研究にはほとんど進展が見られない。本研究では、当該英語の内容語の意味特徴を明らかにすることにより、英語変種間のコミュニケーションに見られる障がいを取り除く、そして非母語話者の英語変種を「正しくない英語」とする見方を正すことを目標とする。

(Received: April 3, 2020 Accepted: September 30, 2020)

Key words: Indian English, Philippine English, semantic nature of content words, semantic extension, Cognitive Linguistic (Semantics)

キーワード: インド英語, フィリピン英語, 内容語の意味特徴, 意味変化 (拡張), 認知言語学 (意味論)

1. 本稿の目的

「英語は世界 (共通) 言語である。」(English is the global language) という趣旨の見出しが新聞や雑誌に溢れるようになって久しい (Crystal 2003: 1)。この言葉の意味するところを正確に理解するためにはさらなる説明が必要であろうが、多くが以下の理由でこの主張を事実として捉え、異議を唱えることはないだろう。まず、世界で英語を意思疎通のための言語として使用する人の数が増えている。現在、世界で 20 億人の人々が英語をコミュニケーションの道具として「使用」していると言われ (吉川 2016: 1)、英語を母語とする人の数はどの言語よりも多い (Crystal 2003: 2)。また英語は、国際的な学術誌、学会や会議において共通語と

して使用されている。そして米国の政治的・経済的影響力も英語のリングフランカ (共通語) の地位に貢献していると言えるだろう。インターネットにより、地域、社会、国境を越え、言語や文化の異なる者同士の意思疎通の場が年々増えているが、その場合、多くが英語になる。また世界の電子データの 80 パーセントは英語で記されている (Crystal 2003: 115)。アジアも例外ではない。英語は、アジアでも言語の異なる者同士がコミュニケーションを図るための道具となりつつある。アジアの 10 か国が加盟するアセアンの共通言語は英語である。アジアは多言語国家が多くあるが、国内・国外問わず、言語の異なる者同士の会話は多くの場合英語で行われる (竹下 2018: 29)。しかし、ここに 2 つの大きな問題が生じる。アジアを含めた、英語を母語

としない国で使用される英語は、英米語のような母語話者の英語とは異なる英語変種であり、そのため、同じ英語でありながら、異なる英語変種話者間で相互理解に障がいが生じる^{注1)}。2つめの問題として、これらの英語変種は単に英米語とは異なるだけではなく、「正しく（適切では）ない」英語と多くが見なしてきた、という事実である^{注2)} (Jenkins 2015: 64, 90-91)。

本稿の目的は、アジアの英語であるインドおよびフィリピン英語特有の内容語の意義の背後にある仕組みを解明することにより、上記の2つの問題、つまり「アジア英語のコミュニケーションの障がい」を取り除き、その結果としてアジア英語への偏見を払拭することを意図した先行研究を含むこれまでの努力・活動に貢献することにある。それではなぜ、アジア英語の内容語の意味解明が上記問題の解決に結び付くのだろうか。ここでは2つの理由を挙げる。1つ目は、諸英語の「理解」に関する先行研究から、音声や文法と比較し、異なる英語話者の相互理解を妨げる主要因は意味にある、という事実である。例えば Smith and Nelson (2006) は、異なる英語間の理解を、intelligibility (音・形態理解【認識】度)、comprehensibility (意味理解度)、interpretability (意図理解度) の3つのレベルに分け、それらの理解度の違いと英語変種の間を論じている。「音・形態理解度」とは、音素やそれからなる形態 (語彙、句、センテンス) を理解 (認識) する能力、「意味理解度」は発話やセンテンスの意味を理解する能力、「意図理解度」とは、発話やセンテンスの背後にある話者の意図を理解する語用論的能力である。多くの母語話者・非母語話者を被検者とした実験を通して、上記スケールの前者から後者に進むほど理解が難しくなる、と彼らは報告している。また同様に重要な点として、上記の3つの「理解度」の違いは、英語変種によっても異なる事実も報告している。例えば、「音・形態理解度」に関して、いろいろな英語変種の会話を3つのグループ (日本人からなる非母語話者グループ、米国人からなる母語話者グループ、多国籍からなる混合グループ) に聞かせた結果、当該理解度において違いが見られた。具体的には、上記3つのグループにとって音や形態が認識しやすい英語は、日本人と中国人、インド人とフィリピン人、そして米国人とインドネシア人の英会話であり、中国人と台湾人、イギリス人とパプアニューギニア人の英会話は「音・形態理解度」がそれらよりも劣っていた。「意味理解度」と「意図理解度」についても同様の違いが報告されている。2つ目の理由は、アジア英語の内容語の意味研究が (ほとんど) 存在しない、という事実である。アジアの土着英語は、近年多くの研究によりその特徴が明らかになりつつあるが、それは、音声、文法、語彙の「記述」

がほとんどで、その分析は音声や文法に限られている^{注3)}。先に記した Smith and Nelson の実験からもわかるように、音や形態の理解以上に、コミュニケーションを阻害している主の原因は言語内外の意味にある。しかし、世界英語の意味研究は全く進展がないのが実情である。本稿ではこれまで光が当てられてこなかった、アジア英語の内容語の意味特徴を明らかにし、その特徴の背後には、英米語のその特徴と共通のメカニズムが働いていることを指摘し、(それゆえ) 英米語とは異質の特徴なのではなく、ただその共通特徴の適応の仕方が異なっている点を指摘する。そして、内容語の意味特徴が明らかになることで、異なる英語変種間でのスムーズなコミュニケーションおよびアジア英語への偏見をとり除くことも本研究の二次的な目的とする。その方法論として認知言語学 (意味論) の多義語に関する知見に立ち分析を行う。語彙の多義分析に関しては、認知言語学に基づく研究以外では、ほとんど行われてはこなかった事実を踏まえると、本稿で認知言語学的アプローチに立つことは適切であると考えられる。なお内容語とは、文法語の対極に位置する語彙カテゴリーとみなす。

本研究の長期的な目標は、アジア英語の語彙の意味特徴の解明であり、その足掛かりとしてインド英語およびフィリピン英語特有の語彙の意味特徴を明らかにすることにある。ではなぜ数あるアジアの土着英語の中からインドとフィリピン英語を分析対象とするのか。その理由としては、それらの国では英語を (準) 公用語 - 政府機関や高等教育機関などで使用される共通の言語 - として使用している点 (他にシンガポール、マレーシアも英語を公用語として使用している。バングラデシュは、パキスタンからの分離独立以前、英語が公用語であったが、今はベンガル語のみである。スリランカでは法的に英語が公用語ではなくなったが、実質その地位を英語は今でも保っている (田中他 2012: 93-119)。)、アジア英語の中ではそれらは最もよく研究されてきたため関連文献が豊富である点、両国の植民地化時代の宗主国がそれぞれイギリス・米国と異なり、支配英語の違いが被支配国英語に如何なる影響を与えるのかを (今後の研究として) 比較することができる点、南アジアと東南アジアと地理的に離れ、その違いを (今後の研究として) 比較することができる点、の4つを本稿では挙げる。

2. アジア地域の英語使用の現状とその問題点

外国人と意思疎通を図る機会が年々増加している。日本への、そして日本からの旅行者、留学生、長期滞在者、労働者の数は年を追うごとに増えている。「海外在留邦人数調査統計 (平成 30 年要約版) によると、平

成 29 年 (2017) の外国に滞留する法人数は 135 万 1970 人で、本統計開始年の昭和 43 年 (1968) 以来最多となっている。平成元年は 586,972 人で、平成 29 年までに約 2.3 倍増加したことになる。そして、言葉が異なる者が意思疎通を図る際、どちらかの母語に相手も習熟している場合を除いて、他のどの言語にもまして英語は「国際共通語」としての地位を確立しつつある (Crystal 2003)^{註4)}。英語は、特にアジア地域でその必要性が高まっている (竹下 2018: 29, 本名 2006, 2018)。上記統計によると、アジアへの法人滞在者の人数が増えていることがわかる。平成 29 年は 393,276 人で平成 20 年の 292,632 人と比較すると、約 1.34 倍の増加である。特記すべき事実は、アジアにおける日系企業の多さであろう。平成 29 年は、アジアにおける日系企業数は 52,860 であり、他地域と比較すると、アジアは 70%、北米 12.5%、西欧 7.7%、旧ソ連を含む東欧は 2.1% となり、アジアでの日系企業の数が出ている。また、アジアからの日本の滞留者の増加、日本とアジアの双方の旅行者数の増加により、ますますアジアの人々の対話の場が増えている。そして、アジアにおける言語の異なる者同士の会話は、(一方が相手の母語を習得している場合を除き) 多くの場合英語となる。ただし、「英語」といっても同じ言語と必ずしも考えることはできない。例えば、インド英語、マレーシア英語、シンガポール英語、フィリピン英語などと呼ばれていることからわかるように、異なった特徴を持つ英語がアジアでは話されている。過去の英米の植民地化政策に伴い、英米語がアジアの地域に拡散し、その土地の文化を吸い込み、英語の土着化が起こり、独立した英語変種として定着した。最初は支配者と被支配者のコミュニケーションの道具として、その後は多くの異なる民族間の共通の言語として英語が広がっていった。この土着英語の問題の一つは、異なる土着英語間のコミュニケーションにおいて、お互いに十分な理解に達しない、という問題が生じることである (Crystal 2002: 241-242)。また、別の問題は、政治的経済的な理由も相まって、アジアの地域の土着英語を「間違った英語」と多くが見なしている事実である (塩澤 2016)。英米語と比較し、「わかりにくい」「変な」「正しくない」「訛っている」とアジアの地域英語をみる向きは、以前ほどではなくなったかもしれないが現在でも多く見受けられる。フィリピンの英会話学校のウェブページ公告には、「講師が話す英語はアメリカ英語に近く、なまりの少ない聞き取りやすい発音」(ぐんぐん英会話)、「発音に癖がないか? アメリカ人、イギリス人に比べて聞きにくいのでは? と疑問を持たれる方もいらっしゃると思いますが、フィリピンでは多くのアメリカの企業がコールセンターとして同国を選んでおり、アメリ

カの消費者に受け入れられています」(テノリエイゴ)とあり、多くがフィリピン英語の「訛り」を心配していることが想定されている (田嶋 2019)。このステレオタイプにより、英語母語話者はアジア地域の英語話者を見下し、アジア人同士もお互いの地域英語ひいてはその話者を見下す、と (小張 2018) は警鐘を鳴らす。

3. インド英語とフィリピン英語

本稿ではアジア英語に焦点を当てるが、その中でもインド英語およびフィリピン英語を考察する。この 2 つの英語変種を分析対象とするのは、以下の理由による。最初の理由は、インドおよびフィリピンでは英語が(準)公用語として使用され、両英語が独自の変化を遂げている点にある。2 つ目の理由は、インド英語は南インドの土着英語の中で、そしてフィリピン英語は東南アジアの土着英語の中で最もよく研究されてきたため、関連資料が豊富である、という事実による (Jenkins 2015: 32)。3 つ目の理由は、両国の植民地時代の宗主国がそれぞれイギリス、米国と異なり、支配英語の違いが被支配国英語に異なる影響を与えるのかを比較することができるという点にある。4 つ目の理由は、アジアの中では両英語が南アジアと東南アジアと異なり、地理的な違い、そこで発達した土着言語、文化的な違いを比較することができるという点にある。また、日本とインド、フィリピンの交流がより深くなっている事実にも注目すべきであろう。インドは、2027 年頃には中国を抜き世界一の人口になると予想され、2030 年には 15 億 364 万人という巨大市場になると予想されている (日本経済新聞 2019.6.24)。人口の約半数が 25 歳以下ということも相まって、日本にとっては魅力的な市場であり、事実多くの日本企業が進出し、政府レベルの対話・協力も増えている。また、日比国際結婚の増加、フィリピン人介護士・看護師の日本への受け入れ、多くの日本人英語学習者のフィリピンに「留学」をする、などにより日本とフィリピン両国の人的交流もまた深まっている (小張 2018: 72)。インド人およびフィリピン人とコミュニケーションを日本人が取る機会はますます増えることが予想される。

インドでの英語の広がりには、17 世紀にイギリスが東インド会社を設立したことに端を発する。各地にミッションスクールが開校し、1854 年にはボンベイ (ムンバイ)、カルカッタ (コルカタ)、マドラス (チェンナイ) にイギリス式の大学が設立され、そこでは英語で授業が行われた (本名 2006: 46)。1871 年からイギリス国王がインド皇帝を兼ねるインド帝国としてイギリス直接統治が始まり、特に英語教育に力を入れ、官庁の文書はそれまでのペルシア語と各地方語の使用を停止し、すべて英語で作成するようになる。インドには統

一言語が存在していなかったことも英語が広く普及した理由であろう。次にフィリピンであるが、その英語事情もその歴史と深くかわる。20世紀初頭、アメリカの植民地になり、それが終了する1946年まで、無償の公教育制度や民主主義の理念が取り入れられ、英語が広く使用された。スペイン支配終了時にスペイン語はフィリピン人口のたった2%しか習得していなかったのに対し、英語は、1939年にはフィリピンの人口の26.60%に、その後は36.05%にまで広がった。その後英語はさらに広がり、フィリピンの文化と融合し、独特の英語が生まれた (Dayag 2012: 91)。言語はマレー諸語の一部で100以上あると言われ、お互いの意思疎通が困難なほど異なっていることも英語の普及に貢献したのだろう。現在でも英語はフィリピン語と共に公用語であり続けている。多くは、バイリンガルではなく、少なくともトリリンガル (trilingual) で、家、学校・職場などで使い分ける。

3.1. インド英語とフィリピン英語の内容語の意味特徴

アジア英語の中では比較的研究が進んでいるインド英語およびフィリピン英語においても、内容語の意味特徴に明らかにする試みは (筆者の知り得る範囲では) 皆無である。ただしこの主張は当該英語の (内容語を含む) 語彙記述および研究に見るべきものはない、と主張しているわけではない。Kachur (2005: 50-4) は、インドを含む南アジアの土着英語の語彙を、外来語、造語 (含複合語)、(英米語から) 意味が変化した語彙という3つに分類し、当該英語特有の語彙をカテゴリーに分け、その後のインド英語の語彙の記述・研究も類似した区別に基づいている (Gargesh 2006: 102)。フィリピン英語に関しては、Batista (1997: 49-71) が意味変化 (拡張)、他英語変種で死語もしくは使用頻度が下がった語彙 (の使用)、造語そして借用語の4つに分類しており、内容語のカテゴリー分類は英語変種に関わらず基本的には同じ、もしくはかなり類似していると考えてよさそう。

本稿の目的は、上記の分類の「意味変化・意味拡張」の特徴を明らかにすることにある。インド英語およびフィリピン英語の語彙の (英米語の当該語彙の基本義からの) 意味変化は多くが触れ、その具体例も挙げているが、個々の変化の背後にある原因を明らかにすることを試みた研究は皆無である。なお、本稿では、「語彙」の中でも、「内容語」に焦点を当てる。冒頭でも記したように、語彙はその性質に基づき2つに分類することができる。1つは「内容語 (content word)」もう一つは「文法語 (function word)」である (Talmy 2000)。なお、言語研究において使用される「機能語」

という言葉と同じ意味で使用している。内容語は、例えば「名詞」や「動詞」のように、典型的にはその意味が具体的であり、文法語は、前置詞、冠詞、接続詞などのように、抽象的で、文法的な役割を担うものが多い。

インド英語およびフィリピン英語特有の内容語の意義は以下のようなケースである。(1)はインド英語 (本名他 2018)、(2)はフィリピン英語 (Anvil-Macquarie Philippine English Dictionary 2010) である。

- (1) (a) bearer 召使い (の少年), ボーイ
- (b) colony 近所
- (c) hotel レストラン
- (2) (a) advanced (時計などが進んでいる【英米語ではfast】)
- (b) chancing (痴漢行為)
- (c) live-in (同棲)

上記を分析する方法論として、本稿では認知意味論的アプローチに、以下で詳述する理由で立つ。

4. 認知意味論的アプローチ

認知意味論は、「意味の問題を知覚や認識との関連で捉える意味理論」である (松本 2003: 3)。認知意味論研究で特に注目すべきものの一つは、「多義語」に関する研究成果である。伝統的な意味論では、カテゴリーの成員を必要十分条件に基づき決定していたが、認知意味論 (言語学) の多くは、プロトタイプを中心とする意味ネットワークモデルを想定する。つまりプロトタイプから周辺の意味に時間の経過と共に派生する、と考える。その派生方法として多くの先行研究では「メタファー」「メトニミー」、さらに研究者によっては「シネクドキー」を想定する (Lakoff and Johnson 1980, 1999: 14; 瀬戸 2007)。上記松本の引用からもわかるように、これらは我々の知覚や認識に基づいている。プロトタイプは我々の認識・経験にとって「最も基本的であり、慣習化の程度・認知的際立ちが高いといった特徴」を有し (靱山他 2003: 141)、メタファーは「我々の比較をする能力」に基づき、メトニミーは、「知覚・認識しやすい対象を通して目標対象を特定する」という我々の日常生活で使用する認知ストラテジーに基づいている。シネクドキーは、「私たちがもっている、ある対象をさまざまな程度の詳しさや特定性で捉える能力」 (靱山他 2003: 82) である。そのため、「プロトタイプ」を中止とし、「メタファー」「メトニミー」そして「シネクドキー」による意味拡張、つまり多義ネットワークは特定の言語だけに当てはまるものではなく普遍的な語彙の構造である、と結論づけることができ

る。本稿でもそれに従い、英米語の内容語の基本義を「プロトタイプ」とし、そこからメタファー、メトニミー、シネクドキーを通してインド英語およびフィリピン英語の内容語の意義に変化し定着した、と考える。

メタファーとは、「2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩」（初山 2010）である。例えば、neck の「人・動物などの首」というプロトタイプから「(瓶などの) 首」への変化、empty の「〈入れ物が〉 空の」というプロトタイプから「〈人生が〉 空の」への変化、attack の「〈人・場所を〉 激しく攻撃する」というプロトタイプから「〈考え・思想を〉 激しく攻撃する」への意味変化を挙げることができる。メトニミーは、「2つの事物の外界における隣接性、さらに広く2つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩」（同上）である。例えば、「あそこの長髪は運動神経が良さそうだ」という文の「長髪」は、一部を使って全体を表しているメトニミーの例である。シネクドキーは「より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味をもつ形式を用いて、より一般的な意味を表す比喩」（同上）である。例えば、「人はパンのみで生きるにあらず」の「パン」は種で食事（類）を表す。それとは逆に、「花見」は「花」という類を使い、種（桜）を表す。類似した例としては、「天気になる」の「天気」や「おめでた」という類概念表現が「(天気が) 良い」や「妊娠」という「種」を表すようなケースである。

4.1. インド英語とフィリピン英語の認知意味論的分析

上記の多義語ネットワーク、つまりプロトタイプの意味（英米の当該内容語の意味）から、メタファー、メトニミーそしてシネクドキーを通して意味が広がるネットワークの考えに基づいて、インド英語およびフィリピン英語の内容語の多義構造を考察する。まずインド英語を考察しよう。インド英語の‘get fired’は、英米語で通常意味する「解雇される」という意味ではなく、「怒鳴られる」という意味で使用される（本名他 2018: 36）。これは「怒り」を「火」に見立てて理解しており、火のイメージを通して怒りを捉えている。Lakoff (1987) によると、我々は経験上「怒り」と体の「熱さ」を関連する生理的特徴と捉え、ANGER を HEAT に基づいて、そして ANGER を FIRE に基づいて理解している。B に基づいて A を理解する、というのがメタファーの基本構造であり、A と B という二つの領域がメタファーに関わっている (p. 383)。1つは

根源領域 (source domain)、もう一つは目標領域 (target domain) である (大堀 2002: 75)。根源領域とは、典型的には私たちの直接の経験で、それを通してより抽象的で捉えどころのない目標領域を理解する、というのがメタファーの基本的な考えである。その写像 (mapping)、つまり根源領域から目標領域への意味の移行の際、イメージスキーマと呼ばれる特定の抽象的なイメージの意味は保持される。これを「不変性の仮説」と呼ぶ (Lakoff 1990)。次に別の種類の意味変化のケースとして、‘hotel’を考えてみよう。‘hotel’「ホテル」は、インド英語では「レストラン」の意味で使用されることが多い (本名他 2018: 43)。これは、空間的に隣接関係のある「ホテル」という全体でその部分「レストラン」を表しており、メトニミーにより意味の拡張と考えることができる。同様に、colony の意味拡張も考えることができる。英米標準語での colony の基本義は「植民(地)」と考えられるが、「広い土地」から「特定の狭い土地」のように全体から部分に意味変化している。‘bath’はインド英語では「シャワー」を意味するが (本名他 2018: 17)、このケースはホテルとは逆の、部分で全体を表すメトニミー拡張のケースである。メトニミーは空間の隣接関係だけではなく、時間の隣接関係も表す。‘accelerate the car’はインド英語では「スピードを出す」の意味で使用されるが、原因で結果を表しており、「時間的隣接関係」のメトニミーである。最後にシネクドキーのケースを考えてみよう。bearer は、もともと「運ぶ人(運搬人)」全体を表す類概念であったが、インド英語では、「召使い(の少年)、ボーイ」とその一例【種】を表すように変化している。類似した内容語の意味拡張は以下の通りである (以下、本名他 (2018) 参照)。

- (3) (a) adapter 電源コード (標 a powery (cable) cord) (米) プラグの意。【空間的隣接 部分で全体?】
- (b) alphabets 文字【部分で全体】
- (c) bath シャワー【空間的隣接】
- (d) designation 職位【原因で結果(指名が原因で特定の職位に就く)】
- (e) take your food 食事をする【原因で結果(食事を取り,(その結果)食べる)】
- (f) put a mail メールを送信する【原因で結果(メールを準備し,(その結果)送信)】
- (g) I am not getting you. わかりません【全体で部分(YOU全体で話す内容(YOUの一部)を表す)】
- (h) time waste おしゃべりで人の時間を無駄にする人【部分で全体(人の行為(部分)をそ

の人（全体）であらわす】

- (i) tuition 1対1のプライベート授業【原因で結果（授業料を支払うことにより、授業を受ける）】

‘stir’「かき回す」「大騒ぎ・混乱」「動き」は、インド英語では「ストライキ（をやる）」の意味で使用される（Gargesh et al (2017: 433)）。この場合、「混乱」や「動き」という類概念が、その種（当該カテゴリーの具体的な混乱や動きの一つ）と考えるなら、これはシネクドキーのケースと考えられるであろう。類似した内容語を以下いくつか挙げる（以下、本名他（2018）参照）。

- (4) (a) bearer 召使いの少年, ボーイ【類で種（「運ぶ人, 担う人」というカテゴリー名で, そのメンバーを表す）】
 (b) convent educated 英語が主な指導言語の学校で教育を受けた【種で類（「修道女での教育」でそれ以外の教育も表す）】
 (c) cover 封筒【類で種】
 (d) eveninging 夕刊【類で種】
 (e) finger chip フレンチフライ【類で種】（指を使い食べるチップスは他にもある）
 (f) front bencher 教室などで前の席に座る人【種で類】
 (g) mail eメール【類で種】
 (h) point (power point) コンセント【類で種】
 (i) sale ガレージセール（店舗のセールは discount sale）【類で種】
 (j) would be 婚約者【類で種】
 (k) carrying 妊娠中【類で種】
 (l) keep 2号さん【類で種】

次にフィリピン英語を考察する（以下、具体例は全て Anvil-Macquarie Philippine English Dictionary (2010) からの引用）。「advanced」は英米語では、「（国などが）進歩した、（学問などが）上級の」などの意味で使用されるが、フィリピン英語ではそれ以外の意味として「（時計などが）進んでいる」の意味で使用（英米語では‘fast’が通常使われる）。この意味変化はメタファーのケースである。根源領域（source domain）は、「物理的に前に進む」という意味、その基本的構造であるイメージスキーマを保持したまま目標領域である時間領域へと写像している。つまり「物理的に移動」しているかのように「時間軸に沿って（抽象的に）移動している」と考えるのである。次にメトニミーのケースを考えてみる。‘Saudi’（英米語では「サウジアラビ

ア人（語）の意味」は、フィリピン英語では「中東」を意味する。これは空間的隣接関係、「部分」で「全体」を表すメトニミーである。同様の例としては、Bombay（インド系フィリピン人全体の意）が挙げられる。最後にシネクドキーのケースとしては、‘chancing’（痴漢行為【類（偶然起こる出来事の総称）で種（その一つ）を表す】、‘colgate’（歯磨き粉【種（商標名）で類（歯磨き粉全て）を表す】、‘language’（タガログ語【類（言語全般）で種（タガログ語）を表す】、‘live-in’（同居【類（住む）で種（特定の住み方一同棲））などがある。American は興味深いケースである。この語は、「（国籍に関係なく）白人」の意味だが、米国人全体を表す類概念がその部分（種）である白人米国人を指し示し、その後米国人以外の白人をも指し示すように変化している。フィリピン英語では、dirty ice cream や dirty kitchen という独特の表現も使用される。これは文字通りの意味ではなく、前者は「路上販売されているアイスクリーム」、後者は「日常用台所」の意味である。これは、その性質に着目するとメトニミーと理解されるが、類と種の関係と考えるならばシネクドキーのケースとなるであろう。同様に cowboy（陽気な人）も考えることができる。

4.2. インド英語とフィリピン英語の内容語の意味特徴の解明がいかに上記問題解決に貢献するか

1章で述べたように、本稿の目的は、2つの問題、つまり「アジア英語のコミュニケーションの障がい」および「アジア英語への偏見」を取り除く研究に貢献することにある。ここでは、インド英語およびフィリピン英語の内容語の意味特徴の解明がいかに上記問題の解決に結び付くのかを議論する。

英語変種間で同じ内容語（例えばフィリピン英語の‘advanced’）の意味が異なる場合、そこには誤解が生じうる。その問題解決に必要な能力（の一つ）は、相手の意図を推論（inference）することができるかどうかである。本稿では、当該英語の英米語の意味と異なる内容語の意味特徴は、メタファー、メトニミーそしてシネクドキーにより説明ができる、と主張してきた。メタファーであれば、根源領域（英米語の当該語彙の基本意義）から目標領域である当該英語の内容語の意味領域に写像されても、その使用されているコンテキストに鑑み、理解する作業が必要である。Lakoff(1987)によると、写像されても意味（構造）が変わらないイメージスキーマは前概念的（preconceptual）、そして普遍的な特徴を持つ、つまり、民族や言語に関わらずイメージスキーマの基本的な構造は共通している、と考えると、英米語の内容語とは違う意義に変化しても、その基底にあるイメージスキーマは誰もが（無意

識のうちに) 所有する共通のイメージであり、それを基に、当該英語の内容語の意味を推測することは(具体的なコンテキストの情報の助けがあれば)十分可能である。

次にメトニミーを考える。メトニミーの基本的意味は、2つの対象の空間的(もしくは時間的)隣接性にあった。典型的には、認知しやすいほうでもう一方を表す比喩表現である。例えば、「一升瓶を飲み干す」や「黒板を消す」などの「一升瓶」や「黒板」は、それが実際に指し示す「液体」や「(黒板に書かれた)文字」よりも知覚されやすい。つまり、普遍的な傾向として、「全体」のほうがその「部分」よりも知覚・認識することが容易である。ただし、必ずそうなるわけではない。「顔を出す」や「足が速い」の「顔」や「足」のように、部分で全体(人)を表すメトニミー表現は数多く存在するが、それは特定のコンテキストにおいて、全体よりも部分のほうが知覚・認識されやすいためである。例えば、しばらく会っていない知り合いに、たまには自宅に立ち寄って話がしたい旨を伝える際、話をする際主の働きをする口がある「顔」が使われるのは自然であろうし、走るのが速い人を述べる際、注目するのは早く走るために最も必要な「足」であろう。ここまでの議論で、メトニミーは、「空間的もしくは時間的に隣接する2つの対象で、認知しやすい一方でもう一方を表す」比喩表現と行うことができるが、「認知しやすい」というのは、経験、知覚、認識領域においてだけではなく、社会的・文化的領域も含まれる。例えば、インド英語の‘bath’(シャワー)、『hotel’(レストラン)はメトニミーのケースだが、それらの意味特徴はインドの社会的コンテキストにおいて説明されなくてはならない。つまり、ある対象が「認知的」に顕著である、というとき、知覚や認識だけではなく、社会的・文化的経験も背景として関わっていると考える必要がある。

最後にシネクドキーを考える。シネクドキーは類と種の関係であり、カテゴリーとその成員(メンバー)の関係である。これもメトニミー同様、社会・文化的コンテキストを十分に考慮する必要がある。例えば、日本語の「花」というと、多くの場合「桜」を意味する。これは花のカテゴリーの中で桜が我々日本人にとって特別な存在だからである。同様に、フィリピン英語の‘colgate’(コルゲート【米国の歯磨きのブランド名】)が歯磨き(粉)全体を表すようになったのは、この商品がフィリピン社会に与えた影響によるものだろうし、類似した例としては、‘kodak’(カメラ【アメリカのコダック社より】)、『xerox’(コピー(機))についても同じことが言えし、‘chancing’が、本来の「偶然起こる出来事」の意味で「偶然を装い女性の体に触

れる」意味に特定されるのは、フィリピン社会を背景に考えなければ理解できないであろう。ここまでの議論をまとめよう。インド英語とフィリピン英語(そしておそらくアジア英語全般)のコミュニケーションの障壁を少しでも取り除くには、当該英語の内容語の意味特徴を理解する必要がある。内容語のプロトタイプの意味(英米語の当該内容語の基本意義)からの変化のパターンは、メタファー、メトニミーそしてシネクドキーの3つであると本稿で主張した。Lakoff(1990)の不変性仮説に従うと、メタファーは、基本義からの変化の際、イメージスキーマを保持している。そのため、結果として生じた意味を理解するのはそれほど困難ではないと考えられる。メトニミーは、空間的もしくは時間的に隣接する2つの対象のうち、「顕著な対象」が大きな役割を果たす。この「顕著な対象」は、経験、知覚そして認識、社会・文化的領域のどれか、もしくは複数においてそうである。そのため、このような当該英語特有の内容語に直面した際、コンテキストから与えられる情報を活用し理解する必要がある。同様のことがシネクドキーにも言える。

ここまでの議論が正しいのならば、インド英語とフィリピン英語の内容語の(英米語とは異なる)意義を、メタファー、メトニミーそしてシネクドキーを通して、なぜそのような意義に変化し、定着したのか、を説明することができる。それらによる意味変化は、我々の共通の認知・知覚を基盤としており、英米語を含む全ての言語(話者)に見られる認知メカニズムである。インド英語およびフィリピン英語特有の内容語の意義が生じた背景にも、英語母語話者と全く同じ認知活動があり、ただその適用の仕方、顕著(重要な)対象が異なっている、と考えることができる。異なる社会・文化において、そこに生きる人々にとって「顕著(重要・必要)」なもの」が異なり、それが反映されるような仕方で共通の認知パターンが異なるかたちで内容語の意義に反映される、と考えるのであれば、それにより形作られた英語を「正しくない」と見なすのは明らかに間違っている。そのため本稿の主張は、当該英語への偏見、つまり「正しくない英語」との見方を変える可能性を秘めている。

5. 結論と今後の展望

本稿では、英語がリンガフランカ(世界共通語)となりつつある現在、それを使用しているコミュニケーションには(少なくとも)2つの問題があることを指摘した。1つは、英語を母語としない人々が話す英語は、英米語のような母語話者の英語とは異なる英語変種であり、そのため同じ英語でありながら異なる英語変種話者間で相互理解に障がいが生じる。2つめの

問題として、これらの英語変種は単に英米語とは異なると見なされるだけではなく、「正しく（適切では）ない」英語と多くが考える、という事実である。上記問題の解決に貢献すべく、本稿ではアジア英語、その中でもインド英語とフィリピン英語の内容語の意義を認知言語学の研究成果に基づき分析した。

アジアの土着英語は近年多くの研究によりその特徴が明らかになっているが、それは音声、文法、語彙の「記述」がほとんどで、その分析は、音声や文法と比較すると内容語は極端に少ない。本稿ではこれまで光が当てられてこなかった、インド英語とフィリピン英語の英語変種の内容語の意味構特徴を、プロトタイプを中心とする多義ネットワークモデルを基に明らかにした。つまり、当該英語の内容語の意味構造も、メタファー、メトニミー、シネクドキーという、人間共通の認知から説明できる点、ただしそれらのメカニズムの適応に関しては英米語とは異なることを主張した。本稿の主張は、英米語とは異なる語彙の意味を持つ他英語変種を理解する道しるべとなり、それを「正しくない」とする誤った考えを是正する方向へと導いてくれる。

本研究の今後の展望として以下のような研究に貢献できることを目指す。1つ目の研究は、アジアの他英語変種の内容語の意義分析である。本稿で議論したインド英語とフィリピン英語同様の特徴が他のアジア英語においても当てはまるのか、別の特徴が見いだされるのか、もしそうであれば、その原因はないか、などを問う。2つ目の研究としては、インド英語とフィリピン英語特有の語彙と地域や社会に関わるものである。当該語彙の意味変化に地域的要因や社会的要因が如何に関わるのかを特定することは、当該英語の意味特徴をさらに解明するためには必要となる。本稿でも指摘したように、フィリピン英語では、'colgate'が、「米国の歯磨きのブランド名から歯磨き（粉）全体の意味へ」、'kodak'が「アメリカのコダック社からカメラ全体の意味へ」、'xerox'が「アメリカの企業名からコピー（機）全体の意味へ」変化する背景には、フィリピン社会での使用頻度と関連がある可能性が高いだろうが、より正確に語るためには、それらの発生の時期、理由、場所などを調査する必要があるだろう。この種の研究は（筆者の知る限り）存在していない。3つ目の研究は、インド英語、フィリピン英語における特異なコロケーションのケースである。本稿では内容語の当該英語に特異な意味変化を観察したが、このことにより、連語関係も英米語とは異なることが予想される。例えば、Jenkins (2009: 44) は、非母語英語で見られる'space time'と'severe criminal'を例として挙げ、母語話者であれば、'spare time'、'serious criminals'と言

う、と指摘している。4つ目は、インド英語とフィリピン英語の内容語のメタファー表現を広範囲に調べ、その背後にある概念メタファーを研究する。内容語がコミュニケーションの妨げになる大きな要因として、メタファーに基づく意味があることは以前から指摘されている（吉川 2016）。Lakoff を創始者とする認知言語学のメタファー研究は、メタファー表現の背後にはメタファー思考があること、そしてメタファー的思考を通して私たちは抽象的な世界を理解している、と主張する。メタファー思考は特別なものではなく、私たちが普段使う多くの表現の礎になっていることは多くの研究が示すところである。英米語以外の英語変種の背後にある概念メタファー研究の例として、アフリカ英語がある（Wolf and Polzenhagen 2009）。彼らの研究から、アフリカ社会では（他社会と比して）食べ物がとても貴重で、これ（そしてこれに関わる行為）に見立てて他のもの（概念）を理解する。この概念メタファーが、例えば eat money のようなアフリカ英語に映し出される、と主張している。インド英語、フィリピン英語を含むアジアの地域英語を観察すると多くのメタファー表現が存在することがわかる。同じ内容を伝える際に同一メタファーが使用される場合もあれば、異なるメタファーが使用される場合もある。今後は、当該英語のメタファーの共通性や違いを比較することにより、その背後にある共通の思考パターン（概念メタファー）および文化特有的な思考の存在の有無を確認したい。また語彙に限定せず、それよりも大きなメタファー表現も視野に入れたい。例えば、以下の例を考えたい。(5a) はマレーシア英語、(5b) はシンガポール英語のメタファー表現の例である（本名 2013: 53）。

- (5) (a) I've eaten more salt than you, son. So don't argue with me.
 (b) Our boss is away today, so we can shake legs all day.

(5a) は、「塩を食べる」で「辛酸をなめる」を表す、(5b) は、「足をぶらぶらさせる」で「リラックスすること」を表す。それぞれのメタファーは「語」ではなく「(動詞) 句」レベルで表されている点に注目してほしい。5つ目の研究は、理論言語学でのこれまでの知見がどの程度アジアの英語変種の説明にも適用されるか、の検証である。本稿では認知言語学（意味論）の研究に基づいて、インド英語およびフィリピン英語の内容語の多義ネットワーク構造を明らかにしてきた。今後はさらに他のアジア英語の分析にも利用し、その知見を理論言語学の分野にも貢献できると考えてい

る。5つ目の研究は日本の英語教育に関わるものである。これまでの日本の英語教育のモデルは英米語だけであった。しかし、国際英語論の立場から見ると、英語学習のモデルは「国際的に通用度の高い英語」(塩澤 2016: 35)であれば、英米語だけに限定される必要はない。まず、英米語以外にも英語が存在する事実を学習者は知る必要がある。そして、それらの歴史、音声・文法・意味などを学びつつ、アジアの地域英語およびそれを話す人々の理解を深めるべきである。国際化の視点およびアジアの人との交流の増加を考慮すると、アジアの英語を学ぶ必要がある。

注

注 1) 世界の英語変種の分類モデルはこれまでに多く提案されてきたが、現在まで最も影響力のあるモデル—ただし問題がない、他モデルよりも優れている、というわけではない—は Kachru (1985: 1-5) であろう。このモデルでは、英語変種を内部圏 (The Inner Circle)、外部圏 (The Outer Circle)、拡張圏 (The Expanding Circle) の3つに分類している。内部圏は英語母語話者が住む国々で、イギリス、米国、カナダ、オーストラリアやニュージーランドである。外部圏は英語を公用語とする国々で、インドやフィリピンそしてシンガポール、マレーシアなどが含まれる。拡張圏は英語を外国語として使用する国々で、ヨーロッパ、アジア、南米などが含まれる。本モデルに従い本稿では内部圏の5カ国以外は英語を母語としない国とする。

注 2) Bangboşe (1998: 3-4) は、新たな英語変種が「適切」もしくは「正しい」と見なされる条件として以下の5つを挙げている。

- a) the demographic factor (当該英語の話者数)
- b) the geographical factor (当該英語の使用範囲)
- c) the authoritative factor (当該英語の使用可能領域)
- d) codification (当該英語の辞書や文法書の存在)
- e) the acceptability factor (当該英語に対する(非)使用者の受け止め方)

Bangboşe (1998: 3-4) は、特に上記条件中 codification と the acceptability factor が最も大切であると、それらが満たされない場合、「間違い」であると判断される(可能性が高い)としている。

注 3) インド英語、フィリピン英語に特徴的な音声、文法および語彙の「記述」に関しては、前者は榎木園 (2012), Gargesh (2006), Gargesh & Sailaja (2017), 本名 (2006), (2018) を、後者はを Bautista & Gonzalez (2006), Lin (2017), 本名 (2006), 小張 (2018) を参照のこと。それらの先行研究では、当該英語変種の音声・文法(前置詞などの文法語も含む)および語彙の記述は豊富に見られる。また、それらの英語変種の音声や文法の特異性をそれらの話者の母語の特徴の反映としている。語彙(内容語)の意味特徴もそのように説明できるケースに小張 (2018) が触れているが、多くはその限りでなく、別の説明を試みている先行研究も(筆者が知る限り)

存在しない。

注 4) 久保田 (2018) は、日本人の海外(アジア)駐在員の言語選択について調査をし、「国際共通語が英語」とは必ずしも言えないことを示している。彼女の調査(中国、タイ、韓国)に基づく、国により職場で使用される言語が異なっている。中国や韓国では、日本語を主として業務言語としているケースが多く、久保田はこの理由をそこでの日本語教育の普及に求めている。そのため、現地採用を含む社員の日本語能力は高い。それに対してタイはタイ語も日本語も使用できない社員が多く、必然的に英語が使われるケースが多い。上記から海外在住の邦人の言語使用は環境(国)によって異なることがわかる。

文 献

- Bangboşe, A. (1998) Torn between the norms: innovations in world Englishes. *World Englishes* 17/1, pp. 1-14.
- Bautista M. L. S. and Andrew B. Gonzalez. (2006) *Southeast Asian Englishes*. Brau B. Kachru. et al. (eds). (2017) *The Handbook of World Englishes*. Blackwell Publishing: Oxford, pp. 130-144.
- Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar; Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. University of Chicago Press: Chicago.
- Crystal, David. (2002) 'Broadcasting the nonstandard message' in R. Watts and P. Trudgill (eds). *Alternative Histories of English*. London: Routledge.
- Crystal, David. (2003) *English as a Global Language*. (Second Ed.) Cambridge University Press. Cambridge.
- Dayag, D. T. (2012) *Philippine English*. Ee-Ling Low and Azirah Hashim (Eds.) *English in Southeast Asia: Features, Policy and Language in use*. John Benjamin Publishing Company. Amsterdam/Philadelphia, pp. 90-99.
- 榎木園哲也 (2012) *インド英語のリスニング*. 研究社: 東京.
- Gargesh, Ravinder. (2006) *South Asian Englishes*. Brau B. Kachru. et al. (eds). *The Handbook of World Englishes*. Blackwell Publishing: Oxford, pp. 90-113.
- Gargesh, Ravinder and Pingali Sailaja. (2017) *South Asia*. Filppula M., Klemola J. and Sharma D (eds.) *The Oxford Handbook of World Englishes*. Oxford University Press. Oxford, pp. 425-447.
- 日野信行 (2018) 母語話者英語と非母語話者英語: 非母語話者英語の正当性を主張する理由. 本名信行他編, *世界の英語・私の英語*. 桐原書店: 東京, pp. 16-26.
- 本名信行 (2006) *英語はアジアを結ぶ*. 玉川大学出版部: 東京.
- 本名信行 (2013) *国際言語としての英語—文化を超えた伝え合い*. 富山房インターナショナル: 東京.
- 本名信行 (編著) (2018) *新アジア英語辞典*. 三修社: 東京.
- Hopper (1991) On some principles of grammaticization. Traugott, Elizabeth Closs and Bernd Heine. (Eds.) *Approach to Grammaticalization* (1). pp. 17-35.
- Jenkins, J. (2009) *Exploring Attitudes towards English as a*

- Lingua Franca in the East Asian Context. Kumiko Murata and Jennifer Kenkins (eds.) *Global Englishes in Asian Contexts: Current and Future Debates*. Palgrave Macmillan: New York.
- Jenkins, J. (2015) *Global Englishes* (3rd Ed.). Routledge: London.
- Kachru, B. B. (1985) Standards, codification and sociolinguistic realism: the English language in the outer circle. R. Quirk and H. G. Widdowson (eds.) *English in the world: teaching and learning the language and literatures*. Cambridge University Press. Cambridge, UK, pp. 11–30.
- Kachru, B. B. (2005) *Asian Englishes: Beyond the Canton*. Hong Kong University Press: Hong Kong.
- 久保田竜子 (2018) *英語教育幻想 ちくま新書*: 東京.
- 小張順弘 (2018) 第6章 フィリピンの英語. 本名信行他編, *世界の英語・私の英語*. 桐原書店: 東京, pp. 62–75.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. University of Chicago Press: Chicago.
- Lakoff, G. (1990) The invariance hypothesis: is abstract reason based on image-schemas? *Cognitive Linguistics*. p. 39–74.
- Lakoff, G. and Johnson, M. (1980) *Metaphors We Live by*. The University of Chicago Press: Chicago.
- Lakoff, G and Johnson, M. (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and its Challenges to Western Thought*. Basic Books: New York.
- Lim, Lisa. (2017) Southeast Asia. Filppula M., Klemola J. and Sharma D (eds.) *The Oxford Handbook of World Englishes*. Oxford University Press. Oxford, pp. 448–471.
- 松本曜 (編著) (2003) *認知意味論*. 大修館: 東京.
- 初山洋介 (2003) 意味の拡張. 松本曜 (編著) (2003) *認知意味論*, pp. 73–134.
- 初山洋介 (2010) *認知言語学入門*. 研究社: 東京.
- 成瀬武史 (1987) *意味の文脈—通じる世界の言葉と心*. 研究社: 東京.
- 大堀壽夫 (2002) *認知言語学*. 東京大学出版会: 東京.
- 瀬戸賢一 (編著) (2007) *多義ネットワーク辞典*. 小学館: 東京.
- 塩澤正他 (2016) 「国際英語論」で変わる日本の英語教育. くろしお出版: 東京.
- Smith, L. E. (1992) Spread of English and issues of intelligibility. B. B. Kachru (Ed.). *The Other Tongue: English across Cultures* (2nd edition). University of Illinois Press. Urbana-Champaign Illinois, USA, p. 75–90.
- Smith, L. E. and Rafiqzad, K. (1979) English for cross-cultural communication: The question of intelligibility. *TESOL Quarterly*, 13(3): pp. 371–380.
- Smith, L. E. and Nelson, C. L. (2006) *World Englishes and Issues of Intelligibility*. B. B. Kachru, Yamuna Kachru, and Cecil L. Nelson. (eds.) Blackwell Publishing, USA, p. 428–445.
- 竹下裕子 (2018) 第三章 アジアの英語事情. 本名信行他編, *世界の英語・私の英語*. 桐原書店: 東京, p. 29–40.
- Talmy, Leoard. 2001. *Toward a Cognitive Semantics*. Vol. 1 & 2. The MIT Press. Cambridge, Massachusetts.
- 田嶋美砂子 (2019) 学校教育における ALT について考える—ESL 圏出身者が与えるインパクト—理論的側面から見る日本の英語教育へのインパクト. JAFEE シンポジウム (発表原稿): 京都.
- 田中春美, 田中幸子 (編者) (2012) *World Englishes 世界の英語への招待*. 昭和堂: 京都.
- Tsuzuki, M and Nakamura, S. (2007) Intelligibility assessment of Japanese accents: A phonological study of science major students' speech. Thomas Hoffmann and Lucia Siebers (Eds.). *World Englishes—Problems, Properties and Prospects*. John Benjamin Publishing Company. Amsterdam/ Philadelphia, p. 239–264.
- Wolf, H. G. and Polzenhagen, F. (2009) *World Englishes: A Cognitive Sociolinguistic Approach, Applications of Cognitive Linguistics 8*. Berlin/New York; Mouton de Gruyter.
- 山口和之 (2020a) インド英語の語彙の意味拡張について: 国際英語の理解を深めるために. シルフェ第 58 号.
- 山口和之 (2020b) フィリピン英語の語彙の意味特徴について: 認知意味論に基づいた意味分析. 日本体育大学紀要第 49 巻, pp. 1089–1098.
- 矢野安剛 (2018) 第5章 マレーシアの英語. 本名信行他編, *世界の英語・私の英語*. 桐原書店: 東京, pp. 53–61.
- 吉川寛 (2016) 国際英語論とは. 塩澤正他編, 「国際英語論」で変わる日本の英語教育. くろしお出版: 東京 p. 1–25.
- 辞書その他
- Anvil-Macquarie Philippine English Dictionary (Revised Edition). (2010) Anvil Publishing: Philippines.
- 外務省領事局政策課 (2018) 海外在留邦人数調査統計 (平成 30 年要約版)
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000368753.pdf> (2020.3.25 閲覧)
- 日本経済新聞 (電子版).
<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO46497070U9A620C1910M00/>

<連絡先>

著者名: 山口和之
住 所: 東京都世田谷区深沢 7-1-1
所 属: 日本体育大学基礎教養系
E-mail アドレス: kazuyamaguchi@nittai.ac.jp